

杖珠院の御本尊は地藏菩薩。地藏は親に先だつた子供の霊を慰める御慈悲仏である。また六道を輪廻する修道を救うともいわれている。

何がきつかけかは存ぜぬが、とにかく里見の棟梁として

「修羅を召される覚悟を抱かれたということは間違いない。これまでの学僧の如きでは在らざることは、まことに祝着なり」

このことを実堯は正木通綱に話した。

「一統」をめざす修羅は困ります」

「うむ。儂もそのことを考えていた」

「頭がいいことは、厄介なことじゃ」

その言葉に、実堯は吹き出した。

とにかくこの一戦で、里見勢は北条と敵対したのである。ここで確たる戦果を上げておく必要があつた。

「小弓公方は扇谷上杉家と足並みを揃えて武蔵・相模を攻めると仰せじゃ。いつそ里見勢も、鎌倉を焼き払うてみたいと思つ」

「鎌倉ですと？」

実堯の言葉に、正木通綱は目を丸くした。

「もはや鎌倉は足利のものでも上杉のものでもない。かつての古都を統べるは北条。ここを焼かれれば、北条の面目は丸潰れである」

「しかし、そんなにうまく物事が」

「殿に〈一統〉の妄想を抱かせぬ為でもある」

実堯はほくそ笑んだ。

鎌倉を焼けば、義豊は多くの宗門から憎まれるだろう。武門の輩として、斯様な立場を負つたことは未だない。ゆえのことと、実堯は嘯いた。

「武将とは修羅を極めること。儂も常々、倅の権七郎には教え聞かせておる」

「そういえば権七郎殿は、御歳いくつにおなりましたか」

「たしか一九だつたと思つ」

「そろそろ嫁の伝手を考えねば？」

「そうさな。いまは小弓公方を通じて、上州箕輪の長野信濃守によき娘がいると勧められておる」

「それは祝着。側室については、万喜城の土岐弾正少弼の娘が年頃と聞いておりますぞ」

婚儀の前から側室は早いと、実堯は思わず笑つた。

品河奇襲の勢いを以て、再度の奇襲をという実堯の進言に対し、意外にも義豊は素直に応じた。〈一統〉を志す義豊なら、実堯の進言に

「好かぬ」

とても憚る予想をしていただけに、拍子抜けさえ覚えた。

が、それはそれで、戦略上の利点でもある。

「次は、鎌倉を攻めます」

「鎌倉？」

怪訝そうに、義豊は眉を顰めた。

「いまの鎌倉は、北条によつて支配されております。往年の栄華は泡沫の如し。殿自らの手でこれを焼き払うことこそ、武門の倅いと心得ます」

「鎌倉か……」

厭だなど、義豊は口籠もつた。

「鎌倉攻めには是非とも、殿御自らの御出馬を賜りたく存じます。武威を鶴岡八幡の御前にお示し下さるよう」

義豊はなんとなく渋り出した。

この切つ先を制す策が、既に実堯にはあつた。

「白浜の又太郎さまは御歳一九と聞きました。

このたびの鎌倉攻めには、ぜひ又太郎さまも御随伴なされませ。お慰めになると思われませ」

「又太郎か」

義豊の正室は烏山時貞の娘で、既に又三郎義員という嫡子がいる。この婚礼前に雑仕女に戯れで生ませたのが、又太郎だ。義通存命中はその傍に置いておいたが、今は捨て置いている状態である。

「又太郎さまも殿の傍におれば、さぞや励まれますよう」

戯れの果てに生ませた子に、義豊は愛着を感じていない。しかし、捨て置いている現状は、やや後ろめたい。その払拭に役立つなら、無

駄ではないだろう。

「叔父上のよろしいように」

億劫そうに義豊は応えた。

このときの尽力に対し、又太郎は終生実堯への恩義を忘れなかった。後年、犬掛合戦の折に父ではなく義堯に附いて、蔭となり里見のため
に尽くしたのも、このときの実堯への感謝に他
ならない。

十
十
十

新たなる敵(5)

夢酔 藤山